

情愛こまやかな人格で、遠く県外から愛媛県支部の運営に御協力をいただいております。

どうぞお二方、いつまでもお元気で暮らし下さるようお祈り申し上げます。

(愛媛県 山本 繁夫)

シベリア抑留記

福岡県 白石 壽

昭和二十(一九四五)年八月九日、ソ連軍は不可侵条約を不法に破棄して、満州全土に侵入して来た。八月十五日、満州鏡泊湖にて敗戦に至り、武装解除となる。独立自動車第一一四大隊、吉林省敦化集結。中隊長梶川峰夫中尉、大隊長湯浅正美大尉、富永中将の指揮下に入る。幕舎生活。昭和二十年十月ごろ、渡辺中尉以下二〇〇〇人、敦化出発。牡丹江、東京城、寧

安、石頭、海林、興隆、掖河。貨車に乗りソ連軍の監視。掖河駅から綏芬河、ハバロフスク、イルクーツク、チタ、タイセット駅から二二キロの第二収容所に着。屋根のない収容所。大隊長は渡辺政雄中尉。私は第一中隊。中隊長は近藤鳩三少尉でした。

作業は森林伐採、幕舎造り、石灰山の作業。毎日、ソ連兵が自動小銃を持つての監視つきです。シベリアの十一月は寒い。朝八時集合。全員各々作業に行き、八時間の重労働。食料は一人一日黒パン三五〇グラム、コウリヤン入りのスープ、野菜少々。労働はソ連兵の監視厳しく、健康でない人は栄養失調になり、無念の思いで毎日淋しい収容所の生活を送る。作業のノルマが上がらねば食料はもらえず、第二収容所では六〇人が病氣、栄養失調で死亡しました。死体は立派に埋葬しました。遺品の一つももらえないのが残念でなりません。ソ連では、働かざる者は食うべからずということがあります。

昭和二十年十二月半ば、第二収容所は閉鎖され、全員各作業大隊に行くことになり、中隊長は小山中

尉。タイセットから一二六キロの所の第一〇収容所に一五〇人が行きました。タイセットを中心に三〇キロごとに各収容所がありました。

私は戦車隊に四年間で機械に経験がありましたので、自動車修理工場で一年間仕事しました。私は健康な体で、作業は森林伐採、薪切り、道路工事、主としてバム鉄道の工事がありました。ここは昼夜三交代、夜中の一時ごろに石バラスを積んだ貨車が来ます。非常招集の鐘が鳴ります。零下三〇度での石バラス下ろし作業。二〇〇人くらい出ます。貨車の長さは二〇メートルがあります。雨雪が降ると石バラスは凍結します。石の上で火を焚いて溶かして作業をします。朝の三時三〇分ごろは零下三五度になります。作業が終わると朝六時で収容所に帰ります。朝食は七時二〇分、朝八時整列、八時三〇分作業開始、作業現場は近くにあります。そのときの外気は零下三〇度はありません。休みは一〇時に一〇分、午後三時に一〇分あります。どこの収容所も同じ休憩です。給料はなく、黒パン一日三五〇グラム、大豆入り塩スープ。秋になると

農民がカルトーシカ（ジャガイモ）を収穫します。それをもらいに行きます。農民は快く「ヤボンスキ、クウセチ（日本人、食べなさい）」と言うのです。三年間ソ連で働いていれば通常の話はできます。何と言っても食物が一番です。人間は食べて働いて社会に尽くすことです。

私等はなせソ連に行かなければならなかったのか、いまだに分かりません。第一〇収容所にて一番苦勞と心配をしたことは、ターチカ作業でした。バム鉄道の工事は、高さ一〇メートル、長さは三キロメートルはありました。一〇段下から上に持ち上げるのです。一段ターチカで上るのは一〇メートル上る作業でした。死亡者はいませんでした。が負傷者五〇人、これが一番心配でたまりません。タイセットから一二六キロ、第一〇収容所での苦しい思い出、あゝのとき負傷された戦友、今元気でいるだろうかと思えることができません。

昭和二十三年六月ごろに第一〇収容所から第二〇収容所へ、バム鉄道工事の応援に二〇〇人行きました。

六月でありますから気候も良くなり、第二〇收容所長は柴山さんでした。

あまり高い山ではありませんでした。シベリアの土地は砂地です。幅一・二メートル、深さ一〇メートルの穴を二人交代で一〇メートル掘る。深さ一〇メートルの所に三メートル角の横穴、これは火薬三トンを詰めるためのもの。それに電気爆破で長さ二キロメートル。この山を爆破すれば日本へ帰国と收容所本部より命令がありました。一致団結して爆破に成功しました。

昭和二十四年六月末、一八五キロ收容所から帰国の途につき、タイセット駅からナホトカ着。

八月二十八日、遠州丸にて二二一中隊一班、舞鶴引揚援護局に帰着。大分県日田市二串町の我が家へ帰省。

シベリア抑留追想記(二)

熊本県 本田 正行

前回(『平和の礎Ⅷ』)の寄稿で記述不足の部分、古い雑記帳の中から抜粋して投稿いたします。

強制抑留の労苦は、いずれも大同小異であることを『平和の礎』を拝読して感ずるのですが、地区的な見地から、その痛みが違うし、また受ける労苦も差異があることも事実です。

歴史の証言としての抑留労苦談も、後世の人々が真実を理解して、再びこのような残酷な事態に遭わぬよう、平和で幸せな社会創造の知恵として理解してもらうことに意義を感じるものです。シベリア抑留の労苦は、少ない食糧でノルマを果たした強制労働に源を発しており、そのために死んでいった戦友の殉死を無駄にせぬようにすることが肝要であり、『平和の礎』発刊の重要性を痛感する次第です。栄養失調で死んで